

建国期マサチューセッツの地方名士ジョン・チョートに関する新史料についての一考察（その1）

和田 光 弘

0. はじめに——2点の新史料

ここに2点の史料がある。その内容から同一の歴史事象に関わるものと考えて間違いない。1点目は縦が30.5cm、横が18.7cmの冊子体で全8ページ⁽¹⁾。横37.4cmの簀の目紙2枚を半分に折り畳み、折った箇所を糸で綴じたものである。糸自体はごく一部にしか残存していないが、通した穴は28か所程度確認され、冊子体として保存しようとした強い意志が感じられる。おそらくはのちに冊子とすることを前提に、紙を二つ折りにした状態で記入し、最後に糸で綴じたと推定される。2点目は、縦32.0cm、横20.0cmの冊子様で全6ページ。1点目の史料とはサイズがやや異なり、少し大きい。3枚の簀の目紙から構成されており、うち2枚については幅が20cmよりも1cm程度大きい紙の、その端の部分折り曲げて⁽²⁾、重ね合わせて4か所を糸で綴じている。したがって、1点目の史料と比べて冊子形状とする意図は弱く、あくまでもまとめて分類・保存するために冊子様にしたとも考えられる。

これら2点が、当該事象の全体を網羅しているのかどうか、定かではない。なんとなれば、本史料は筆者が米国のディーラーから入手した品であり、そのディーラーも現状以上の情報を持ち合わせていないからである。ただ、子孫が放出したものであって、これまで図書館・文書館等に収められたことのない「うぶな」状態のものであることは間違いない。網羅的であるかは不詳とはいえ、この2点の史料に記された内容から当該事象、すなわち本新史料の正体は容易に推測できる。18世紀末、マサチューセッツ州イプスウィッチで死去したジョン・チョートなる人物の遺産競売に関するもので、おそらくは相続の際の検認手続きのために必要な家財の処分等に関して、克明に記した報告書（会計簿）である。このように一家・一族にとって重要な文書であったがゆえ、破棄されることなく200年以上にわたって保管（ないし放置）されてきたのであろう。かくしてこの文書は、この極東の地で目覚めることとなった。新史料の内容の詳細は後述するとして、まずわれわれが解明すべきは、ジョン・チョート本人についてである。歴史学的にはまったく「無名の」人物であり、この新史料にも彼の生涯に関する直接的な記載はない。したがって、まずは新史料の外部から、ジョン・チョートの実像を追跡してゆく必要がある。

(1)

1. ジョン・チョートのライフイベント

われらがジョン・チョートは、フランシス・チョートとハンナ・(パーキンズ)・チョートの子で、マサチューセッツはエセックス郡イプスウィッチにて誕生し、同じイプスウィッチのシェバコで死去している。地元の名士として「殿 (エスクワイア)」と呼ばれることになったとはいえ、歴史学的に見れば、市井のまったくの一個人にすぎない。したがって、この「無名の」人物の生涯をたどりうる情報は、決して多くはない。だが、ローカルかつパーソナルな史料を駆使すれば、基本的な情報の追跡は可能である (そしてそれらのほとんどは今日、ウェブ上で取得できる)。

たとえば彼の出生・結婚・死亡等に関する公的情報は、極めて簡潔ながらも、20世紀初頭に上梓された以下の2冊の書物から得ることができる。

Essex Institute, *Vital Records of Ipswich, Massachusetts, to the end of the year 1849, Vol. 1: Births* (Salem, Mass., 1910). (『イプスウィッチ人口動態記録』第1巻 [出生])

Id., *Vital Records of Ipswich, Massachusetts, to the end of the year 1849, Vol. 2: Marriages and Deaths* (Salem, Mass., 1910–19). (『イプスウィッチ人口動態記録』第2巻 [結婚・死亡])

上記第1巻からは、次のような洗礼記録が確認できる。

「ジョン、フランシスとハンナの息子。1737年11月13日洗礼。シェバコ教区教会記録」(p. 88)

上記第2巻からは、次のような婚姻記録と死亡記録を得る。ただし、婚姻記録は夫と妻の両家(一族)において(すなわちチョート家とエヴェレス家、ニューマン家において)記録されており、メアリとの結婚については次のような2件の記載がある。

「チョート家、ジョン(ジュニア、第四教会記録)とメアリ・エヴェレス、1760年11月6日、婚姻意向通知」(p. 98)

「エヴェレス家、メアリとジョン・チョート(ジュニア、第四教会記録)、1760年11月6日、婚姻意向通知」(p. 156)

サラとの結婚については、次の2件である。

「チョート家、ジョン^{エスクワイア}殿とニューベリーポートのサラ・ニューマン夫人、1789年3月28日、婚姻意向通知」(p. 98)

「ニューマン家、ニューベリーポートのサラ夫人とジョン・チョート殿、1789年3月28日、婚姻意向通知」(p. 318)

一方、死亡記録は次のとおりである。

「ジョン、殿、1791年7月6日死去(享年54歳、シェバコ教区教会記録)」(p. 523)

また、マサチューセッツ州エセックス郡イプスウィッチにあるオールド・サウス墓地に眠る彼の墓碑には、次のような銘が刻まれている(墓碑自体は新しいものだが、以前の古い墓碑を

忠実に再現していると考えられる)。

「建立/ジョン・チョート殿/を偲んで/1791年7月7日/逝去/享年/54歳」⁽³⁾

さらに、先祖がアメリカに移住して来てからのチョート一族の歴史を描いた書物も存在し、ジョンとその家族については、同書の中で2ページにわたって記載されている。

E. O. Jameson, *The Choates in America, 1643-1896: John Choate and His Descendants, Chebacco, Ipswich, Mass., Illustrated* (Boston: Alfred Mudge & Son, 1896) (E・O・ジェイムソン『アメリカにおけるチョート一族、1643年-1896年』), pp. 65-66. である。同書は三世紀にわたるチョート家の歴史を克明に描いており、牧師のE・O・ジェイムソン(1832年-1902年)の手になる。彼は地元の郷土史に通じ、他に『アメリカにおけるコグスウェル一族』(1884年頃)や『マサチューセッツ州メドウエイの歴史』(1886年頃)などの著作がある。

19世紀末に刊行されたこの『アメリカにおけるチョート一族』は458頁にもおよぶ浩瀚なもので、そのタイトルにあるとおり、挿絵も豊富に挿入されている。当時利用可能なさまざまな史資料を集成しつつ、基本的に時系列に沿って一族の歴史を記述しており、用いた史資料については典拠——そのページ数——まで示し、高い実証度を誇る。もちろん一方で、一族に伝わる伝承の類も収録しており、とりわけ古い時代については、内容の信憑性に疑念なしとはしない。

われわれのジョン・チョートに関する記載は、おもに65-66ページにある(題名にも含まれているジョン・チョートはアメリカに移住した一族の祖で、われわれのジョンと同名の先祖である)。この2ページ分については、第3章で抄訳したい。

上記3点を含む計7点の史資料の情報から、ジョン・チョートのライフイベントについてまとめたのが次ページの表1である。出生、洗礼、最初の妻メアリとの婚姻、メアリとの子ども数(男女別)、2番目の妻サラとの婚姻、死亡、享年という、彼にとって重要なイベントに関して、これら7点のデータソースにはどのように記されているのかを同表で一覧できる(「無名の」一個人たるジョンについて、このような表を作成したのは筆者が最初で最後(おそらくは)であろう)。①~③は前述のもので、①『イプスウィッチ人口動態記録』は公的記録であり、最も信頼できる(ないし信頼すべき)情報源といえる。②は彼の墓碑銘、③は『アメリカにおけるチョート一族』である。一方、④~⑥はいずれも、アメリカで盛んな先祖探しのためのウェブサイトであり、今日ではかなり充実した内容を誇っている。ただしジョン・チョートについて、これらウェブサイトに記載されている情報は主として①~③を典拠として収集されたと考えられ、たとえば⑦は③に全面的に依拠してその情報を取り入れている。ただし、死亡日をサラとの婚姻日と錯誤している点(表のc)は、このサイトのチェックの甘さを示唆しているといえる。

出生・洗礼に関連する情報として、公的記録(教会記録)は洗礼日のみしか語らない。誕生日については、おそらくは先祖代々伝わる聖書(ファミリー・バイブル)に記された情報を基

表1 ジョン・チョートのライフイベント

	出生	洗礼	メアリとの婚姻	[子ども数 (男, 女)]	サラとの婚姻	死亡	享年
①	—	1737年11月13日	1760年11月6日*	11 (3, 8)	1789年3月28日*	1791年7月6日	54歳
②	—	—	—	—	—	1791年7月7日	54歳
③	1737年11月10日	—	1760年11月14日	13 (3, 10)	1789年4月16日	1791年7月7日	—
④	1737年11月10日	—	1760年11月6日	11 (3, 8)	—	1791年7月6日	53歳
⑤	1737年3月13日 ^a	1737年11月13日	1760年11月14日 ^b	—	1789年4月16日	1791年7月6日	—
⑥	1737年	1737年11月13日	1760年11月6日	10 (3, 7)	1789年3月28日	1791年7月7日	53~54歳
⑦	1737年11月10日	—	1760年11月14日	13 (3, 10)	—	1789年4月16日 ^c	—

*: 婚姻意向通知日、a: 洗礼の日付と錯誤・誤植、もしくは洗礼日から8か月遡算、b: 11月6日も婚姻日として併記、c: サラとの婚姻日と錯誤

①『イプスウィッチ人口動態記録』、②墓碑銘、③『アメリカにおけるチョート一族』、④FamilySearch、⑤WikiTree、⑥Find A Grave、⑦Familypedia

にしたと考えられる③が必須となる。ただし⑤のみ、出生の日付が異なっているが、洗礼日とこの日付が同じ13日とされていることから、洗礼日との単なる錯誤ないし誤植か、もしくは洗礼日から単純に8か月遡った日付が挙げられていると推測され(表のa)、信憑性の度合いは低いと思われる。したがって、③に記された誕生日(おそらくはファミリー・バイブルに記された彼の誕生日)を採用するならば、教会記録にある洗礼日(そして『イプスウィッチ人口動態記録』に記載された洗礼日)との隔たりは、わずか3日であり、出生後、比較的すみやかに洗礼が施されたことがわかる⁽⁴⁾。

婚姻についても、公的な①に記されているのは婚姻意向通知の日付であり(表中の*)、実際の結婚日は③が記しているといえよう。結婚に先立って、婚姻意向通知を公的な場所に掲示するというのは欧米における伝統に他ならず、掲示の間、異議申し立てがなければ、滞りなく結婚へと進むことができる。通常、その期間は1か月程度が想定されるが、さまざまなバリエーションが考えられ、ジョンの場合も、同郷のメアリとの結婚に関して婚姻意向通知日から婚姻までわずか1週間強である。1か月にははるかに届かないため、婚姻日について疑念なしとしないが、地域で周知の若者2人の初婚であるため、異議申し立ての可能性は極めて低かったと思われることに鑑みれば、妥当な期間ともいえる(ちなみに、④・⑥は11月6日を婚姻日としているが(⑤もこの日付を併記)、正確には婚姻意向通知日とするべきであろう)。一方、サラとの結婚に関しては、再婚同士ということもあってか、婚姻意向通知日から婚姻までは3週間弱で、きわめて妥当な期間といえる。なお、子どもに関しては後述する。

死亡・享年について、まず、死亡の日付は7月6日、7月7日の2通りがあるものの、いわば誤差の範囲内といえる(たとえば、実際の死亡時点か、葬儀の時点かなど)。②の墓碑銘や③の記す7日の信憑性も高いが、ここでは公的記録である①が記す6日を採用しておきたい。享年については、誕生日を1737年11月10日とするならば、厳密には53歳が正しい。ただ

し、正確には53歳とほぼ8か月なので、54歳としても決して間違というわけではなく、①や②はそのように記している。ただ本稿では、今日的な厳密性を優先して53歳としておきたい。

さて、上記のごとく各種史資料の比較検討を経て、妥当と思われる日付を選択するならば、表中の網掛けのようになる。かくして、二百年以上も前に亡くなった市井の一個人たるジョン・チョートのライフイベントは、次のごとく復元される。彼の誕生日は1737年11月10日、洗礼は同年同月13日、メアリとの婚姻意向通知日は1760年11月6日、婚姻日は同年同月14日、サラとの婚姻意向通知日は1789年3月28日、婚姻日は同年4月16日、死亡日は1791年7月6日、享年は53歳(と8か月)である。彼の場合、③の史料が存在することが、このような復元にきわめて有利に働いていることは確かであるが、③が存在しない人物の場合でも、①の史料を用いれば、近似の情報は得ることができるのであって、その意味でも、われらのジョンは、無名の一個人の「普通の」具体例なのである。

2. ジョン・チョートの子どもたち

表1に示したように、データソースによってばらつきはあるものの、ジョンとメアリには子どもが10名ないし13名誕生した。男女の内訳は、男児が3名、女児が7名ないし10名である。この子どもたちについて、性別、誕生日、洗礼日、婚姻日、死亡日、享年などを一覧にしたのが表2である。

原則として同表中のデータの典拠は、「出生」については『アメリカにおけるチョート一族』(以下、『チョート一族』)、「洗礼」は『イプスウィッチ人口動態記録』第1巻(以下、『人口動態記録』第1巻)、「推定婚姻日」は『イプスウィッチ人口動態記録』第2巻(以下、『人口動態記録』第2巻)、「死亡」は『チョート一族』と『人口動態記録』第2巻を用いた。「死亡」に関して『チョート一族』に記載があるのが11名、『人口動態記録』第2巻にチョート家の一員として記録が残されているのが7名(表中に*を付した者)であり、後者の7名については、前者の史料に記載された日付と完全に一致している。

同7名について、a.『チョート一族』(p.65)と、b.『人口動態記録』第2巻「死亡」(pp.521-524)の記載を列挙するならば、次のようになる(なお、表2の享年については、出生日から正確に計算しているため、以下の史料中の数値と一致していない場合もある)。

【第1子ジョン】

- a. 「ジョン、出生1761年8月14日、若くして死去、1786年11月30日」、「長男のジョン・チョートは、1780年6月3日に投獄される⁽⁵⁾。後にブリッグ船の船長となり、1786年11月30日にフランスの沖合いで行方不明」
- b. 「ジョン、船長、フランスの沖合いにて難破、1786年11月30日、26歳、シェバコ教区教会記録」

表2 ジョン・チョートの子どもたち

	名前	性別	出生	洗礼	洗礼までの期間	推定婚姻日 [年齢]	死亡	享年
1	ジョン	男	1761/8/14	1764/4/22	約2年8か月	1786/3/? [24歳]	1786/11/30*	25歳
2	メアリ	女	1762/11/7	1764/4/22	約1年5か月	—	1789/11/15*	27歳
3	ルーシー	女	1764/9/15	1764/9/23	8日	1785/10/6 [21歳]	1787/7/2	22歳
4	ハンナ	女	1767/5/4	1767/5/10	6日	1781/6/21 [14歳]	1784/1/4	16歳
5	クリスチャン	女	1769/6/20	1767/6/25	5日	—	—	?
6	エリザベス	女	1771/6/25	1771/6/30	5日	1786/12/31 [15歳]	1790/10/16	19歳
7	アビゲイル	女	1773/2/13	1773/2/14	1日	—	1773/12/6*	0歳
8	アビゲイル	女	1774/9/7	1774/9/11	4日	1789/3/29 [14歳]	1798/7/4*	23歳
9	フランシス	男	1776/12/3	1776/12/8	5日	—	1793/3/30*	16歳
10	サラ	女	1778/7/2	1778/7/5	3日	—	1778/9/17*	0歳
11	ジョゼフ	男	1780/1/1	1780/1/16	15日	—	1780/3/1*	0歳
12	サラ	女	1781/5/27	—	—	—	乳幼児期	?
13	サラ	女	—	1784/6/3	—	—	—	?

【第2子メアリ】

- a. 「メアリ、出生1762年11月7日、若くして死去、1789年11月15日」
 b. 「メアリ、ジョン殿の娘、肺病、1789年11月15日、28歳、シェバコ教区教会記録」

【第7子アビゲイル】

- a. 「アビゲイル、出生1773年2月13日、乳児期に死去、1773年12月16日」
 b. 「アビゲイル、ジョンの娘、口腔潰瘍、1773年12月16日、およそ10か月、シェバコ教区教会記録」

【第8子アビゲイル】

- a. 「アビゲイル、出生1774年9月7日、若くして死去、1798年7月4日」
 b. 「アビゲイル、ジョン殿の娘、1798年7月4日、23歳」

【第9子フランシス】

- a. 「フランシス、出生1776年12月3日、若くして死去、1793年3月30日」
 b. 「フランシス、ジョン殿の息子、1793年3月30日、17歳、シェバコ教区教会記録」

【第10子サラ】

- a. 「サラ、出生1778年7月2日、乳児期に死去、1778年9月17日」
 b. 「サラ、ジョン殿の娘、百日咳、1778年9月17日、2か月、シェバコ教区教会記録」

【第11子ジョゼフ】

- a. 「ジョゼフ、出生1780年1月1日、乳児期に死去、1780年3月1日」
 b. 「ジョゼフ、ジョン殿の息子、引付けと口腔潰瘍、1780年3月1日、およそ2か月、シェ

バコ教区教会記録」

名前に網掛けをした第12子と第13子(同名のサラ)については『人口動態記録』第1巻の出生記録に載っておらず、『チョート一族』のみからの情報となる。したがって、この2名の実在については疑念なしとしないが、前述のように、おそらく『チョート一族』はファミリー・バイブルに記載された家族の情報などが典拠となっていると考えられるため、公的記録には残ってはいなくとも、この2名がこの世に生を受けた実在の子どもであったと考えて、矛盾があるわけではない。ただ、記載がないのは、この2名が早世したからでもあろう。そもそもサラの名自体、第10子のサラが、わずか2か月強でこの世を去ったため、第12子もサラと名づけ、さらにその子も早世したため、次の女兒にさらにサラと名づけたのであろう。この最後の子どものサラは洗礼を受けてはいるが、『人口動態記録』に情報がないことから、やはり乳幼児期に死去したと推測される。

ちなみに妻のメアリは1738年6月11日に洗礼を受け(典拠①)、88年8月8日に死去しており(典拠③)、享年はおそらく50歳である(したがって、夫婦の年齢差は1歳未満)。上記のように第12子・13子の実在も認めるならば、ジョンとメアリは結婚の翌年に、ともに23歳で第1子をもうけ、以後、ほぼ1年ないし2年間隔で子に恵まれ、最後の第13子はメアリが46歳という高齢の時の子となる。やや生物学的に不自然な感なしとしないが、38歳で産んだ第9子以降、すなわち40歳で出産した第10子から13子までの4名ともに乳児で死去している(と推測される)のも、そのような理由ゆえなのかもしれない。第1子以降、男児がなかなか生まれなかったため、出産を続けた可能性もある。

子どもたちの洗礼について見れば、第1子のジョンと第2子のメアリは、2人とも同じ日に洗礼を受けており、それぞれ出生から2年半、1年半程度の開きが生じているが、これは何らかの事情による例外であって、それ以降は、ほぼ1週間以内に洗礼を施しているため、出生日との乖離は小さい。ただ逆に、出生日と洗礼日が全くの同日という記録はない。

子どもたちの婚姻に関しては、わが国のように戸籍簿は存在しないので、『人口動態記録』第2巻に記載された名前と、その婚姻日(正確にはすべて婚姻意向通知日)における年齢、さらには婚姻日が死亡時よりも前であるかどうかなどから、総合的に妥当性を判断するしかない。この名寄せに際して、同名の者も多いため、結婚したのがその当人であるかどうか、最終的な断定はできないものの、上記の情報を照らし合わせて推測するならば、表にあるように5名が結婚していた可能性が考えられる。女性の結婚年齢は、1人を除いて十代半ばとなっており、われわれの推定・同定が正しいとするならば、比較的早婚といえる⁽⁶⁾。

死亡に関しては、13名のうち、不明の2名(第5子・13子)を除いて、乳幼児期の死亡が4名(不明の2名もおそらくは乳幼児期の死亡と思われるため、合わせると6名)、10代での死亡3名、20代の死亡4名であり、30代まで生きのびた者は、誰一人いない。父親のジョンが亡くなった時点で存命だったのは2名(表中に網掛けをした第8子と第9子)のみであつ

た。ジョンとメアリは、当時のニューイングランドの基準（植民地時代で7名程度）に比しても多産といってよいが、子どもの成長まで視野に入れてとらえるならば、かなり過酷な状況を見て取ることができよう。ジョンはメアリを亡くしてから一年以内（およそ8か月）でサラと再婚するが、その時のサラの年齢はおそらく37歳と推定される⁽⁷⁾。人口再生産の困難な17世紀などと比べれば、死亡率は改善されているとはいえ、依然、平均余命が短かった当時、再婚はきわめて一般的であった。ただジョンは、この再婚から2年強でこの世を去っている。サラとの間には、子どもはおらず、ジョンの死亡時点で彼の遺産を主に相続しうる身内は、妻のサラ（当時40歳）と第8子（七女）アビゲイル（16歳）、第9子（次男）フランシス（14歳）の3名であったが、アビゲイルはすでに嫁いでいたと推測されるため、遺産の多くを相続しえたのはサラとフランシスである。ただしフランシスについては、当時、この年齢で一般的だった他の世帯への住み込みの奉公人、もしくはとりわけニューイングランドで一般的だった船乗りとして、実家を離れていた可能性も高く、その場合、彼にとって義母となるサラが、もっぱら相続を差配したと考えられる（フランシスは競売の1年4か月後には死去）。このような状況は、われわれの新史料を分析する際に、重要な前提条件となる。

3. 『アメリカにおけるチョート一族』に見るジョンとサラ

本章では前章までで明らかとなった諸事実については重複を避けつつ、おもにジョン本人、そしてサラとの関係に焦点を当てながら、『アメリカにおけるチョート一族』におけるジョン・チョート関連の記述を抄訳しておきたい⁽⁸⁾。

* * *

チョート氏は1789年4月16日に、マサチューセッツ州ニューベリーポートのジョセフ・ニューマンの未亡人、サラ・(ジョンソン)・ニューマン夫人と結婚。彼らはマサチューセッツ州イプスウィッチに居住。ジョン・チョート殿は1791年7月7日に亡くなり、サラ・チョート夫人は1792年10月24日、ブラッドストリート・パーカーと結婚。パーカー夫人は1820年8月15日死去。……

伝えられるところによれば、チョート氏は若いころ、馬から振り落とされて頭を打ったことから、それまでの暗愚が治り、非常に聡明な人物となったという。彼は短気であったが、思いのたけを述べた後は、すぐにおとなしくなった。……

1791年7月、ジョン・チョート殿は54の年に肺病で亡くなった。……彼は町の公職を歴任し、小学校の公共不動産管理人、1781年、83年、85年、86年、88年に議員を務め、治安判事でもあった。その有能さと高潔さゆえに、公私にわたって高い尊敬を受けた人物であった。

……

ジョン・チョートは、ニューベリーのダニエル・ノイズや、マイケル・ファーリー、ジョン・コグズウェルとともに、連邦憲法を批准、承認した会議に1787年12月3日、代表として送られた。……

サラ・(ニューマン)・チョート夫人、旧姓ジョンソンは、マサチューセッツ州グローヴランドのブラッドストリート・パーカーの3番目の妻となった。……

パーカー氏は、アビー・パーカー・(コグズウェル)・チョート夫人の高祖父で、彼女は現在、ジョン・チョート殿がかつて住んでいた家に居住している。……

[チョート] 一族の一人は、別の一人に向けて、次のように冗談めかして書いている。

「サラ・ニューマン・チョート・パーカーは、明らかに目立った性格だったが、たとえ美人であっても、3回、4回と結婚する資格などない。彼女が思上がった野心家であることは明らかで、7人の夫を持った聖書の中の女性といい勝負だ。……彼女はまた、寡婦産ビジネス(dower business)を熟知していて、最大限利用した。彼女はニューベリーポートのジョゼフ・ニューマン船長の寡婦となり、当然のごとくニューマンからの寡婦産を手し、ジョン・チョート殿と結婚した。そして[ジョンの死後]さらに異様なまでに膨れ上がった寡婦産を所有したままシェバコを去ったと、ジョージ[ジョンの誤植か]・チョート殿であれば涙ながらに証言しただろう。彼女が、あなたの祖先であるブラッドストリート・パーカーより長生きしたのか、また彼を出し抜いたのか、私は知らないが、どこかの時点で[彼女に]死が訪れて、さらなる所業を止めたのだと思う。彼女に魅了された私の祖父は、彼女とジョン殿の結婚式を見にニューベリーポートまで出向いたそうだ。熱病の発作にかかったような人生ののちに、いま彼女が安らかな眠りにについていることを願っている。」

サラ・パーカーは1820年8月15日、72歳9か月でその命を閉じた。

* * *

後半はとりわけ興味深い証言となっている。「別の一人に向けて」とは、アビー・パーカー・(コグズウェル)・チョート夫人の意であろうか。この記述に従えば、ジョンが晩年に再婚したサラは「悪女」で、むろん夫を殺したわけではなかろうが、いわゆる後妻業(black widow business)——史料中では「寡婦産ビジネス」——で財を成したと、少なくとも一族の人々が考えていたことが窺われる⁽⁹⁾。本稿で扱う新史料は、ジョンの死後まもなく、家財・動産の多くが競売に付されたことを直接に証言するものであり、さらなる再婚相手を求めて——すなわち「寡婦産ビジネス」をさらに推し進めるべく——別の地へ移動しようとしたサラが、相続不動産相当の即金を手に入れようとしたと考えると説明がつく(本人もごく一部、競売に参加しているとはいえ、同じ屋敷に寡婦として住み続けるつもりならば、かくも多くの家財を処分する必要はなかったであろう)。ただしその際、ジョンが残した借金の返済のため、家財を売却・現金化せざるをえなかった可能性は、もちろん否定できない。ともあれ、再婚によって構成さ

れる複合家族も多かった当時の家系の「裏事情」を、ここに垣間見ることができる。しかしそのおかげで、ジョン・チョートの家財・動産を死亡時点で「凍結」させた、いわばタイムカプセルのごとき本史料が生成されたのは皮肉と言えよう。

4. 新史料の翻刻と分析——1791年11月14日の第1回競売結果

「はじめに」では、本新史料の物理的形態——テクスチャーと呼びたい——について述べたが、これらの史料以外に、ジョン・チョート本人に関して、文書館等に何か他の史料は残っていないのだろうか。じつのところ、マサチューセッツ州セイラムにあるピーボディ・エセックス博物館のフィリップス・ライブラリーには、「チョート家文書 (Choate Family Papers, 1678, 1727-1918, 1947, 1987-1992)」が収められており、これは17箱から成る文書群で、以下の5つのシリーズより構成されている。列挙してみよう。

第1シリーズ：個人文書。チョート家18名のメンバーの書簡、証書、領収書、財産目録、日記、写真等からなる。メンバーごとに下位分類され、アルファベット順に並べられている。

第2シリーズ：冊子体文書。チョート家の自伝、アルバム、グリーティング・カード、手帳等、綴じられた文書。

第3シリーズ：書籍。聖書、宗教書、賛美歌集、種子カタログ等、印刷されたもので、3種類に下位分類されている。

第4シリーズ：ハスケル家文書。シメオン・ハスケル他、ハスケル家の文書。

第5シリーズ：その他。チョート家メンバーの肖像画に付けられた銀製のプレート3点、片眼鏡1点。

上記のシリーズの中から、ジョン・チョートに関して調べると、第1シリーズの2点（史料数としては10点）が確認できる。その内容は以下のとおりである。

①ジョン・チョートとダニエル・ギディングズの書簡（1769年）。1つのフォルダーに4点の書簡を収録。ギディングズはカナダ、ノヴァスコシア植民地のセントジョンズ在住で、チョートがマサチューセッツ湾植民地のセイラムから送った書簡は2点。4点の書簡の内容は、主としてノヴァスコシアの漁業に関わるもので、捕った魚の輸送についての法的、技術的、商業的側面に関して記されている。

②ジョン・チョートの領収書（1764年-90年）。チョートが購入した物品の領収書。計6点あり、うち4点はセイラムの商人ウィリアム・グレイから購入した物品に関するもの。

以上である⁽¹⁰⁾。

ジョン・チョートは市井の一個人とはいえ、名家の一員でもあり、このようにわずかながらも史料が残存し、公的な形で収められている。したがって、もしもわれわれの新史料が上記の「チョート家文書」に収録されていたとすれば、単葉形状として扱われた場合は（元は綴じら

れていたものとはいえ)、おそらく第1シリーズのジョン・チョートのファイル(第3のフォルダー)にその居を見出していたであろう。もしくは、本来の冊子形状が重視されたならば、第2シリーズに収録されていた可能性もある。とまれ、このようにジョン・チョートの他の文書と対比するならば、本新史料の価値の高さは一層際立つといえよう。

今回、本稿で取り上げるのは、「はじめに」で述べた新史料のうちの1点目、さらにその全8ページ中、最初の3ページ分、すなわち1791年11月14日の競売結果を記した文書(会計簿)である(本稿末の写真、史料1～史料3)。本史料の作成者は不詳であるが、筆致やスペリング、計算の正確さなどから、素人の親族とは考えにくく、おそらくは当地の公証人か弁護士と想定して間違いなからう。なお、本冊子史料の全体構成については、次稿で明らかにする予定である。

まずは史料1ページ目の冒頭に置かれたタイトルを掲げたい。

「先日逝去したジョン・チョート殿の遺産[遺産財団]に属する家財について、1791年11月14日実施の競売により売却された当該の家財の勘定及び購入者の氏名(An Account of Things Sold by Public vendue, Nov [November] 14th 1791 // and the Names of the Several Persons who bought the Goods belonging // to the Estate of John Choate Esq[Esquire] late deceased //(11))」

本史料の内容を示して過不足のないタイトルといえる。括弧付きで「遺産財団」と挿入したのは、英米法では相続にあたって、まず被相続人の財産は遺産財団(estate)に移され、裁判所の管理下で検認(probate)の手続きを経て、最終的に相続人が相続するためである。

なお、本史料の1ページ目に付されたページ番号は「2ページ(“Page 2^d”)」であるが(すなわちこの冊子は2ページから始まっているが)、当該ページは冊子の表面であり、また、上記のような包括的なタイトルがその冒頭に記されていることから、当該ページから内容が始まっているのは明らかである(ページ番号の第1ページは、表紙であった可能性があろう)。つまり、少なくともこの史料に関わる競売については、この史料の前に何らかの競売が開催された可能性はきわめて低く、その意味では、本史料の内容に欠損はないと考えられる。したがって、この11月14日の競売が、ジョン・チョートの家財に関する第1回目の競売と考えるのも問題はなからう。

さて、上記、原史料の3ページ分を翻刻し、極力、オリジナルのレイアウトや表記を尊重しながら、なおかつ、わかりやすくまとめたのが表3である。大文字・小文字の別や、数値の表記法なども、原史料に倣って忠実に写している。若干の注記を述べるならば、まず1行目の“Line”、“Name”、“Item”の語は、表の構造を示すために筆者が付したもので、左端のコラムの行番号も、原史料の改行に忠実に対応させつつ、筆者が新たに付した。一方、“What sold for”、“What received”の表記は原史料のままで、むろんそれぞれ「売却[落札]金額」、「領収金額」の意である。また、原史料の2ページ目以降の冒頭に置かれた“Foot brought forward”の語、1ページ目以降の最終行に置かれた“Carried forward”の語も、原史料のまま

表3 ジョン・チャョートの家財に関する第1回競売結果

Line	Name	Item 1	Item 2	Item 3	Item 4	What sold for			What received		
						£	s.	d.	£	s.	d.
【Page 2 ^d 】											
An Account of Things Sold by Public vendue, Nov [November] 14 th 1791											
and the Names of the Several Persons who bought the Goods belonging											
to the Estate of John Choate Esq ^r [Esquire] late deceased											
1	George Choate	1 hay hook 10 ^d	1 rake 7 ^d	2 pitch forks 1/11 ^d		—	3	4			
2		pewter dish 2/1	T. [Table] Cloth 2/5			—	4	6	—	2	1
3		1 pair hames 1/3 ^d	1 Chain 9/.	1 P ^r Iraces [laces] 8/2	2 Sheets 10/9	1	[09]	2			
4		1 Yoke 3/2	Shod wheels and Cart 31/.	1 plow 11/.	Culender [Calendar] 1/3	2	6	5			
5	Dea ⁿ [Deacon] Nathaniel Haskeil	3 rakes 1/1 ^d	1 Scythe 1/1	1 fork 5		•	2	7	—	2	7
6	Samuel Qualls	1 fork 8 ^d	3 pair setters 5/10 ^d	1 Cow 50/.		2	16	6	2	16	6
7	Peter Coffin Jnr	1 pitch fork 1/8 ^d	hames 1/1 ^d	1 Cow 52/6		2	15	3	2	15	3
8		1 Heifer 46/6 ^d	1 Bull 42/.	1 pair stean 55/.	1 heifer 32/.	8	15	6	8	15	6
9	William Dodge	Horse traces 9/1	1 Yoke 1/10 ^d			—	10	11	—	10	11
10	John Choate	1 Horse Collar 2/.	fire Shovel & tongs 4/9			—	6	9	—	6	9
11	Elisha Story	1 Chain 10/9 ^d	1 Yoke Oxen £ 10			10	10	9	10	10	9
12		3h [half] yards Lamb Skin at 4/.	2 Singing Books 1/4 ^d			—	15	4	—	15	4
13	John Woodbury Jnr	1 Chain 8/.	1 Saddle 24/.			1	12	—	1	11	10 1/2
14	Nat ^l [Nathaniel] Burnam [Burnham]	Grindstone [Grindstone] 3/.	2 Books 5/10 ^d	2 pamphlets 2/.		—	10	10	—	10	10
15		1 pair Window Curtain 23/.	10 plates 13/.	2 pil. [pillow] Cases 2/6		1	18	6	1	18	6
16	Joseph Procter ⁽¹⁾	1 Scythe 2/.				•	2	•	•	2	•
17	Capt [Captain] Dan ^l [Daniel] Giddings	1 Scythe 5/.	1 bridle 2/1	1 Cow 55/6		3	2	7	3	2	7
18	Timothy Bragg	1 bridle 2/6				—	2	6	—	2	6
19	Thomas Giddings	1 Saddle 12/2 ^d				•	12	2	•	12	2
20	Capt. [Captain] Tim. ^o [Timothy] Jackman	Saddle bags 4/.	1 Currycomb [Currycomb] 1/.			•	5	•	•	5	•
21		1 fat Sow 66/.	y ^c [the] 5 th ton Salt hay on the West mow 22/.			4	8	•	4	8	•
22		the remainder of east mow after 6 tons are sold @ 22/6 two ton				2	5	—	2	5	—
23	George Norton	1 plow 3/6 ^d				—	3	6	—	3	6

Line	Name	Item 1	Item 2	Item 3	Item 4	What sold for			What received		
						£	s.	d.	£	s.	d.
15	Ebenezer Cogswell	the Chaise £15·16·6				15	16	6	15	16	6
16	Aaron Craft	2/3 of the flax 50/6 ^d	1 Ton Hay 22/6 ^d			3	13	0	3	13	0
17	D ^r [Doctor] Nehemiah Cleveland Esq ^r	1 book 1/7 ^d				—	1	7	—	1	7
18	Abraham Perkins	2 d ^o 3/.	1 blanket 9/.	1 pail 1/2 ^d		—	13	2	—	13	2
19		3 1/2 yards Lambskin at 3/10 ^d	2 3/4 yards Shalloon			—	19	5 1/2	—	19	5 1/2
20	Israel Burnham	1 book 2/8 ^d	1 p ^r pillow Cases 2/11 ^d			—	5	7	—	5	7
21	Thomas Burnham 3 ^d	Chronoly [Chronology] 1/8 ^d				—	1	8	—	1	8
22	D ^r Parker Prust	Universal Gazetteer 5/.	Eng ^r Grammer [Grammar] 2/1	1 Table Cloth 2/7 ^d		—	9	8	—	9	8
23	Nathaniel Cogswell	4 latin [latin] Books 5/1				—	5	1	—	5	1
24	Joseph Story	1 book 7/.	blanket 7/6			—	14	6	—	14	6
25	John Fitz	1 book 2/.	7 Quilt 13/.	1 Sheet 6/.	2 pillow Cases 3/	1	4	0	1	4	·
26		1 pair Sheets 10/2 ^d	1 table Cloth 4/2	1 d ^o 7/3 ^d		1	1	7	1	1	7
27	Job Choate	3 books 7/2 ^d				—	7	2	—	7	2
28	Ebenezer Burnham	books 2/1	hand Irons 4/6 ^d			—	6	7	—	6	7
29	William Cogswell	a number of Pamphlets				—	2	6	—	2	6
30	Elias Andrews	d ^o 2/				—	2	0	—	2	0
31	Thomas Ross	1 d ^o 1/3 ^d				—	1	3	—	1	3
32	Eleanor Low	1 D ^o 1/.	1 pail 1/.	1 bason [basin] 1/4 ^d		—	3	4	·	3	4
33	Nathaniel Holmes	a number of d ^o 2/8 ^d				—	2	8	—	2	8
34	Benjamin Dodge	d ^o 2/9 ^d	Wind ^o [Window] Curtains 15/1			—	17	10	—	17	10
35	Nathaniel Wells	1 book 1/3 ^d				—	1	3	—	1	3
36	Aaron Foster J ^{nr}	1 Coverlid [Coverlet] 9/.	2 pillow Cases 3/4 ^d	blanket 5/		—	17	4	—	17	4
37	Francis Prockter	1 Quilt 13/10 ^d	Coffee pot 1/.			—	14	10	—	14	10
	Carried forward					£	156	12	10 ⁽⁶⁾		
	【4th】										
	foot brought forward										
	brought forward					156	12	10 ⁽⁶⁾			
1	M ^{rs} Sarah Choate	1 Quilt 12/10 ^d	2 blankets 15/6			2	9	4	2	9	4
2		2 Sheet [sheets] 6/6 ^d	1 d ^o 3/6 ^d	2 d ^o 6/6 ^d	4 napkins 4/6						
3		1 napkin 1/7 ^d	1 pair pillow Cases 2/1	1 d ^o 1/1	2 table Clothes 8/.	—	12	9	·	12	9

4	Nabby Choate	1 Sheet 1/3 ^d	2 pillow Cases 4/1	2 Sheets 2/1 ^d	—	7	5	—	7	5
5	Jacob Story	1 Table Cloth 2/1 ^d	2 pillow Cases 2/9 ^d		—	4	10	—	4	10
6	Jacob Story	1 Sheet 5/.			—	5	0	—	5	0
7	Jacob Burnham	6 napkins 7/8	2 pillow Cases 2/6		—	10	2	—	10	2
8	Asa Low	1 Table Cloth 2/4 ^d	lookg [looking] Glass 5/1 ^d	1 bason [basin] 2/8 ^d	—	10	1	—	10	1
9	Asa Low	5 Napkins 6/	1 Sheet 6/		•	12	•	•	12	•
10	Joshua Smith	1 Table Cloth 6/10 ^d			—	6	10			
11	Jacob Andrews	1 Table Cloth 2/8	1 pewter Dish 3/1 ^d		—	5	9	0	5	9
12	William Cogswell J ^{nr}	1 p' [pair] Dogs 6/9 ^d	pewter dish 2/5		—	9	2	—	9	2
13		3 1/2 yards Lambskin at 3/11 ^d			—	13	8 1/2	—	13	8 1/2
14	Daniel Giddings J ^{nr}	y ^e [the] 3 ^d ton of English hay 48/.			2	8	0	2	8	0
15		4 basons 3/2 ^d	1 platter 1/10 ^d		—	10	3	—	10	3
16	Aloses Lufkin	3 ^d Ton Salt hay 21/	2 ^d D ^o of Eng. [English] 48/6 ^d	1 3/4 yards Corduroy 5/3 kettle 3/.	3	12	6	1	10	0
17	John Thorn Dodge	the stalks & husks 60/			3	0	0	3	0	0
18		the 1 st & 2 ^d Ton Salt hay on East mow at 20/6 ^d			2	1	0	2	1	0
19	Amos Burnham	y ^e 4 th ton d ^o 22/.			1	2	0	1	2	0
20	John Andrews	5 th Ton d ^o at 22/6 ^d			1	2	6	1	2	6
21	Benjamin Andrews	1 st Ton on the west mow 20/6	3 ^d d ^o 22/.		2	2	6	2	2	6
22	Elisha Whitney Esq ^r	2 ^d d ^o 20/6 ^d			1	0	6	1	0	6
23	David Andrews	4 th d ^o at 22/.			1	2	0	1	2	0
24	James Andrews jnr	6 th d ^o 22/.	7 th d ^o 21/6 ^d		2	3	6	2	3	6
25		the 10 th d ^o 20/6 ^d			1	0	6	1	0	6
26	Edward Knowlton	the 8 th d ^o at 20/6 ^d			1	0	6	1	0	6
27	John Edwards	9 th 20/6 ^d			1	0	6	1	0	6
28	Col. Jonathan Cogswell	3 1/2 yards Lambskin at 3/11 ^d			—	13	5	—	13	5
Brought from the foot of the next leaf ⁽⁸⁾					187	19	6 ⁽⁷⁾			
					90	7	1			
					278	6	7 ⁽⁹⁾			
					18	10	10 ⁽¹⁰⁾			
1 p ^r boots 7/1 ^d Case of knives & forks 4/ deducted which did not belong to the Estate & 2 p ^r Trowsers [trousers] 7/9					277	7	9 ⁽¹¹⁾			
8/7 ^d deducted for hooks bid of by Amos Story & not taken away ⁽¹²⁾					8	7				
					276	11	2 ⁽¹³⁾			

※ 網掛けは、売却金額に対して領収金額が不足しているもの。

で、それぞれ「罫下繰越 (b.f.)」、^{けした}「次葉繰越」となる。

この表について、細かな点も含めて、いくつか重要な注記をしておきたい（少々小さいが、表中の括弧付きの番号をご覧ください）。まず、(1)を付した2人の人物、史料2ページ（すなわち1ページ目）の16行（以後、p. 2, l. 16と略記）の Joseph Procter と、p. 2, l. 30の John Procter は、おそらく同じ一族（ないし一家）と思われるが、姓の綴りが異なっている。ただし、このように同族・同家と思われる人物で、姓の綴りが異なっている例は、他には見られない。したがって、これは逆に、本史料の作成者（一応、公証人としておく）の精度が窺われる事例ともいえる。次に、史料2ページ（1ページ目）最終行の「次葉繰越」と、3ページ（2ページ目）冒頭の「罫下繰越」の金額欄のポンドに付した(2)であるが、この数値は、正しくは94ポンドであって、95ポンドではない（表中では史料の表記に合わせて95としている）。じつのところ、史料中の金額については、筆者も行ごとにアイテムを合計し、公証人が記した数値と照らし合わせて、すべて検算をほどこしている。その結果、ほとんどの数値が正確であることを確認したが、この2ページ全体の数値の合計については、さすがにわずかなミスが生じたということであろう。アメリカ合衆国が正式にドル・セントの単位を導入するのは翌年、1792年の鑄貨法からであるが、この十進法に不慣れな人々は、しばらくはポンド・シリング・ペンスの従来の表記を用い続けた（たとえば表中のスラッシュ（/）は、むろんシリングを意味する）。イギリス式の表記法は、十進法に比べればかなり計算が複雑だが、これに慣れた者にとっては、むしろ計算しやすかったかもしれないものの、一方で間違いやすいことも確かであり、その意味では、やはり公証人の計算の精度は高かったといえる。

(3)を付した、史料 p. 3, l. 3に記載された文言、すなわち「抹消されたこの行の品は反対側のページにある」が意味する「この行」とはむろん、次の p. 3, l. 4に他ならず、「反対側のページにある」とは、前頁に記載された、同じ「イライシャ・ストーリー」が購入した品、すなわち、p. 2, l. 11のアイテム2「軛につないだ牛 [雄牛] 1組、10ポンド」と、p. 2, l. 12のアイテム2「歌集2冊、1シリング4ペンス」である。同じ品を再び記載してしまったために、線を引いて抹消したのであろう。ここでも公証人の丁寧な仕事ぶりが見て取れる（むろん最初から間違わないのが最も正確だが、過ちがチェックされ、訂正されていることに留意したい）。ちなみに、「軛につないだ牛 [雄牛] 1組」と訳した原語は“1 Yoke Oxen”であり、数値が「1」にもかかわらず、牛に複数形が用いられているのは、おそらく、軛で2頭（以上）の牛をつなぎ、荷車などの運搬用に用いたと推測されることから、「1組」とした（また、ox はむろん一般的には雄牛、とりわけ去勢雄牛の意であるが、漠然とウシ属に用いられている可能性もあるため、「牛 [雄牛]」と訳出している）。この“Yoke Oxen”が、牛そのものを含意し、器具の軛だけを意味しているのではないことは、その価格から容易に確認できる。たとえば、軛だけの場合、3シリング2ペンス（p. 2, l. 4）、1シリング10ペンス（p. 2, l. 9）の記載があり、一方、全部で9点の記載がある牛（cow）の場合は、大体2ポンド半から3ポンド以上の価格となっ

ており、軀につないだ複数の「牛 [雄牛]」が10ポンドというのは、きわめて妥当であろう。

(4)を付した、史料p. 3, l. 10は、11ペンスが記載漏れとなっている。珍しい間違いといえる。(5)を付した、史料p. 3, l. 12も、実のところ、半ペニーが記載漏れである。ただしこの場合、少額であるために、あえて合計に組み込まなかった可能性もあるが、他の箇所では半ペニーも記載している例が——個々のアイテムではなく、合計の数値で——4か所あることから、やはり間違いというべきであろう。先述の(2)に加えて、これらも計算に組み込むならば、史料3ページの最終行「次葉繰越」(および史料4の冒頭「罫下繰越」)の合計(すなわち(6))は、正確には155ポンド13シリング9.5ペンスとなる。表3に記載されている「156ポンド12シリング10ペンス」は、むしろ史料どおりに記したものであり、(2)、(4)、(5)を計算に入れなければ、史料3ページの合計の演算自体は正しいが、正確な金額とは、1ポンド弱の開きがある。この両者の金額の開きが(あまり大きくないとはいえ)、以後の計算にも影響を与えることになる。

(7)は、史料4ページまでの総計だが、さらに半ペニーが省略されており、史料上の金額「187ポンド19ペンス6シリング」に対して、正確な額は187ポンド6ペンスである。次の行は、史料5ページ・6ページに記されている第2回目の競売(一週間後の11月21日実施)の売上総額「90ポンド7シリング1ペニー」を「次葉罫下から繰入」(すなわち(8))したもので、これら2回の競売の売上額の総計は、史料上では「278ポンド6シリング7ペンス」(すなわち(9))だが、正確には277ポンド7シリング7ペンスとなる(ただし(8)については未検算)。さらに次の行、すなわち(10)の「18シリング10ペンス」は、その左2行に記されている品、「遺産に含まれていないブーツ1足、7シリング1ペニー、ナイフ・フォーク1ケース、4シリング、ズボン⁽¹²⁾2本、7シリング9ペンス」を合計したもので、ジョン・チョートの「遺産に含まれていな」かったため、この金額を差し引いて、「277ポンド7シリング9ペンス」(すなわち(11))となるが、これも正確には276ポンド8シリング9ペンスである。次の行の「8シリング7ペンス」は、同行の左の(12)にあるとおり、「エイモス・ストーリーが[第2回目の競売で9シリング9ペンスで]落札した[70個の]釣針のうち、持って行かなかった分」に相当し、このキャンセル分を除いた最終金額が(13)の「276ポンド11シリング2ペンス」である。これも正確には276ポンド2ペンスとなる。このように競売後にかなり細かな調整を経て、最終的に確定した金額は、わずか11シリングの誤差しかなく、かなり正確な計算といえる。そしてこのおよそ276ポンドという額は、これが完全にすべて支払われたわけではないにしろ、ある程度大きな動産を意味しているといえよう。

このように表3中に登場するさまざまなアイテム、すなわち売却された動産の訳語については、次稿において、売却先の人物別にまとめた新たな表を作成するなかで、代金の領収率などとともに提示し、それらの人物とジョン・チョートとの関係についても同時に考察する予定である。ただ、この表3を一瞥するだけでも、あらゆる動産が売却の対象となっていることは明らかである。それらを大別すると、食器や布類など、家屋内で用いられる家財、すなわち

消費財と、農機具や家畜、干し草など、主として農業で用いられる財、すなわち生産財に分けられよう。地方名士とはいえ、農業を主たる生業としていたことが、ここから窺われる。そしてかくのごとく、競売でほとんどの生産財を手放せば、今後、この家で農業を続けていくことは不可能と思われ、さらに、身近な家財をこのように多く手放すならば、この家に住み続けることも難しかろう（第2回の競売では、さらに多くの消費財が売却されている）。その意味でも、「寡婦産ビジネス」の語が脳裏をよぎらざるをえない。一方で、やはり先述したように、この表は、ジョン・チョート家の消費財、生産財をまるごとリスト化したタイムカプセルたりえているのである。

これらさまざまなアイテムの中でも、とりわけ興味深い“salt hay”と“English hay”については、やや詳しく見てゆく必要がある。そもそもニューイングランド東部の海岸地帯には、海水を含む湿地帯が広がっており、「大湿地帯（Great Marsh）」、「大塩性湿地帯（Great Salt Marsh）」と呼ばれる。マサチューセッツ州エセックス郡北東部の半分程度はその中に含まれ、われらがジョン・チョートが生まれ、暮らしたエセックス郡イプスウィッチもその地理的景観を共有している。この塩性湿地帯に生育する草で作られた干し草が「塩性干し草（salt hay, salt marsh hay）」で、通常土地で作られた干し草、すなわち“English hay”と区別される（それゆえ、“English hay”には単に「干し草」の訳語を与えたい）。塩性干し草は、海水の塩分を含んで肥沃な沈泥（シルト）で育つため、特に肥料を与えなくとも生育し、滋味豊かな牧草やマルチ（根覆い）などに用いられる。そして、この塩性干し草の乾燥に際しては、湿地に満ちる潮を避けるために、何本もの杭を立てて地面から少し浮かせるという独特の積み方が伝統的におこなわれており、この湿地帯に独特の風景、風情を与えている（図1の絵葉書を参照）。その運搬には



図1 イプスウィッチの塩性湿地帯に作られた塩性干し草の山。
1915年頃の絵葉書（筆者蔵）

通常の荷馬車に加えて、ニューイングランド特有の大型平底船(ガンダロー船)も使われた。

イプスウィッチ歴史協会の創設者で牧師のT・F・ウォーターズ(1851-1919年)が、20世紀初頭に同歴史協会から上梓した著書、『マサチューセッツ湾植民地のイプスウィッチ』(Thomas Franklin Waters, *Ipswich in the Massachusetts Bay Colony*, Ipswich, Mass., 1905)には、塩性干し草について次のような記述が見える。「広大な湿地は、塩性干し草を大量に育み、それは屋根葺き材となる」(p. 11)、「塩性干し草の荷下ろしには、荷馬車よりもボートを用いる方が扱いやすい」(p. 80)。いにしへの農民たちは皆、このような湿地の地所の何筆かを所有しており、それは価値ある財産ともみなされていたのである⁽¹³⁾。

さて表3の中で、これらの干し草や塩性干し草に関しては、たとえば次のように記されている。「西干し草置場の塩性干し草の5番目の山、22シリング」(p. 2, l. 21)、「干し草の3番目の山、48シリング」(p. 4, l. 14)、「東干し草置場の塩性干し草の1番目と2番目の山、各20シリング6ペンス」(p. 4, l. 18)といった具合である。これらの記述から、ジョン・チョートの干し草置場には西と東の最低2か所があったこと、またそこに置かれている干し草には、一山(ton)ごとに番号が振られていたこと(競売のために振られた仮の番号の可能性も高い)などがわかる。じつのところ、これら干し草関連の表3中の記述は合計22点にも及び、そのすべてを分類、整理した上でまとめたのが表4である。「山」の番号がわかるもの、もしくは推測しうるものについてはその番号を振り、さらに通常の干し草(「英」)なのか塩性干し草(「塩」)なのか、また一山の落札価格、そしてそれぞれが記載されている史料上のページと行数も付した。

少しく説明を加えるならば、たとえば西干し草置場の山には、5番目の山を除いて史料中に「塩性」とは明記されていないが(表中の「塩?」)、それぞれの山の落札額から判断して、すべて塩性干し草であることは間違いなからう。東干し草置場についても同様に、塩性が明記されていないケース(5点)も、落札額から塩性であることが容易に判断できる。さらに東干し草置場の場合、史料中に番号は記されているが場所が記されていない山が1点、逆に番号は記されていないが場所が記されている山が2点、番号も場所も記されていない山が1点

表4 干し草と塩性干し草の記載

番号	英/塩	価格 (s. d.)	記載 (p., l.)
【西干し草置場】			
1	塩?	20/6	4, 21
2	塩?	20/6	4, 22
3	塩?	22/0	4, 21
4	塩?	22/0	4, 23
5	塩	22/0	2, 21
6	塩?	22/0	4, 24
7	塩?	21/6	4, 24
8	塩?	20/6	4, 26
9	塩?	20/6	4, 27
10	塩?	20/6	4, 25
【東干し草置場】			
1	塩	20/6	4, 18
2	塩	20/6	4, 18
3?	塩	21/0	4, 16
4	塩?	22/0	4, 19
5	塩?	22/6	4, 20
6?	塩?	22/6	3, 16
7?	塩?	22/6	2, 22
8?	塩?	22/6	2, 22
【場所不詳】			
1	英	48/0	2, 37
2	英	48/6	4, 16
3	英	48/0	4, 14
[2山]	塩	19/0	2, 32

(いずれも番号に?を付した)を含んでいるが、これらは以下の理由から、この東干し草置場に位置し、当該の番号が振られるべきであると推定される。まず「3?」は、場所は記されていないものの、番号は3番と書かれており、それに当てはまるのは、史料中に2番と4番の山が登場しながらも3番が明らかでないこの置場しかない(西干し草置場には3番目の山が明記されている)。「7?」と「8?」は逆に、場所は東干し草置場との記載があるが、番号は不詳である。しかしこの2山の典拠、すなわち史料中のp. 2, l. 21を見ると、「6つの山が売却された後、東干し草置場の残り2山、各22シリング6ペンス」とあり、東干し草置場には、計8山ほど置かれていたことが想定されることから、これら残りの2山に番号を振るとするならば、自動的に7番、8番となろう。そして、5番目の山まで史料中に登場しながらも、「6つの山が売却」が示唆する6番目が明らかでないことから、これに相当する山は、番号も場所も不詳な「[Englishとも salt とも表記のない] 干し草 1山、22シリング6ペンス」(p. 3, l. 16)しかない(消去法を用いれば、この山しか、全22点の中で残らない)。

また、表4で「場所不詳」と記した4点のうち、少なくとも3点については、置かれていたのは西干し草置場でも東干し草置場でもないと考えられる。なんとすれば、それら3点はすべて塩性でない干し草、すなわち English hay だからである。その落札価格も、一山48シリング強である。これに対して東西干し草置場の塩性干し草は、一山20シリング6ペンスから22シリング6ペンスであり(東干し草置場の山の方が、若干高値評価)、English hay は、ほぼ2倍の価格を付けていることがわかる。このように両者の価値に歴然とした差がある以上、その置き場所も違っていたと考えて不自然ではない。以上のような状況を総合的に判断するならば、もっぱら塩性干し草が置かれていた西干し草置場と東干し草置場は、いずれも塩性湿地帯の中に位置していたと推論すべきではなかろうか。このように想定すれば、すべてのつじつまが合うのである。一方、English hay の3山は、湿地帯以外の土地、つまり通常の農地などに置かれていたと考えるべきであろう。なお、表4の最後の2山は塩性干し草であるが、一山19シリングであり、東西干し草置場の山と比べても安価となっている。このやや異質な2山は、湿地帯の中で東西どちらの干し草置場にも属さない場所、もしくはどちらかの置場の片隅に置かれていたと理解しても大過なからう。すなわち、東西合わせて20程度の塩性干し草の山(図1を再び参照)を擁する地所を、ジョン・チョートは塩性湿地帯に有していたのである。このように、史料に基づきつつ、わずかな証拠を手掛かりに丁寧に推論を重ねてゆくならば、18世紀末当時、この「無名」の人物を取り巻いていた地理的環境をも、再現することが可能となるのである⁽¹⁴⁾。

註

(1) 最後の7-8ページのみ、上部が切り取られ、縦が28.0cmとされているが、内容の毀損はない。意図は判

然としなが、7ページ目のタイトルを少し下の位置から書き始めてしまったために、空白を嫌って上部の余白を切り取ったとも考えられる。

- (2) その端の部分は比較的雑に切り取られており、大きめの罫の目紙に記入したのちに、鋏などを用いて切断したと考えられる。
- (3) “ERECTED/ In Memory of / John Choate Esq./ who departed this/ Life July 7th 1791/ In the 54 year/ of his [age]” (末尾の語は、土に埋もれて不詳)。②の写真は⑥に掲載されている。
- (4) ちなみに、シェイクスピアの誕生日と洗礼日についてしばしば指摘されるように、当時は乳児の死亡する可能性が高かったため、生まれてすぐに洗礼を受けさせたとされており、その場合、洗礼日と誕生日は一致することになる。シェイクスピアとは時代・場所は異なるものの、ジョンのごとく差が3日であれば、十分に「生まれてすぐに」の範疇に含まれるといつてよかろう。
- (5) 独立戦争に関連したものである可能性がある。
- (6) チョート家の婚姻に関する情報は、『人口動態記録』第2巻の pp. 96-100から得られる。『チョート一族』には、ジョンの子どもたちの婚姻への言及は第3子のルーシーに関してのみで、その日付は『人口動態記録』の情報と一致している。
- (7) 『人口動態記録』第1巻によれば、旧姓ジョンソンのサラの洗礼日は1751年5月5日と思われる。ただし同名で1742年3月28日洗礼の人物の可能性もあり、その場合は婚姻時に46歳となる(いずれも p. 211)。
- (8) ちなみにチョート一族が輩出した著名な人物として、次の3名が挙げられる(*Concise Dictionary of American Biography*, 5th ed., Vol. 1 (New York, 1997), p. 214)。①ルーファス・チョート(1799-1859年)。マサチューセッツ州の法律家・政治家で、ダニエル・ウェブスターとホイッグ党を結成。1841年から45年まで連邦上院議員を務めた。②ジョゼフ・H・チョート(1832-1917年)。非常に有能な弁護士・外交官で、1899-1905年にイギリス大使を務めた。共和党員。③アン・H・C・チョート(1886-1967年)。アメリカのガールスカウトの中心的な指導者。1920-22年に会長職を務めている。
- (9) たとえば証言には、「パーカー氏は、アビー・パーカー・(コグズウェル)・チョート夫人の高祖父で、彼女は現在、ジョン・チョート殿がかつて住んでいた家に居住している」とあり、ミドルネームにパーカーが含まれていることから、ジョン・チョートの家屋敷をサラが相続し、それらを寡婦産として保有したままパーカーと再婚したと推測することもできる。ただし、上記夫人のファミリーネームがチョートであることから、むしろチョート家に受け継がれた可能性もある。なお、本来、寡婦産(dower)の語は、夫の不動態の3分の1が歴史的定義であるが、おそらく動産をも包含する(動産が代替する)ものとして広く意識されていた可能性もあろう。
- (10) ピーボディ・エセックス博物館のウェブサイトも参照。
- (11) “//”は改行の意で、筆者による挿入。なお、タイトル中の“Public vendue”を「公売」と訳すとミスリーディングとなる可能性もあるため、あえて「競売」としている。
- (12) 史料上は“Trowsers”で、trousersの異字。近世の男性は半ズボンのブリッチズを着用しており、長ズボンは下層民の穿く作業着の風情であったが、革命後の18世紀末からは長ズボンがむしろフォーマルとなった。この小さな1語は、かかる大きな事情を反映したものといえる。
- (13) “Historic Ipswich on the Massachusetts North Shore”のウェブサイト、“Gathering Salt Marsh Hay”も参照。今日もこの伝統は受け継がれており、塩性干し草の積み上げを実演した動画もYouTubeにアップロードされている(“Salt Hay Stacking”)。
- (14) ちなみに、1週間後(同月21日)におこなわれた第2回目の競売では、主として家屋内の家財が売却されており、干し草については競売対象として記載されていない。したがって、干し草の売却に関しては第1回目の競売で完結していると考えられ、本稿の推論は揺るがないといえる。

キーワード：建国期アメリカ、イプスウィッチ、ジョン・チョート、寡婦産ビジネス、大塩性湿地帯

Abstract

A Note on the New Historical Documents of a Local Worthy, John Choate
in Early National Massachusetts (Part 1)

Mitsuhiro Wada

This article's main contribution is bringing to light some never-before-seen documents written at the end of the 18th century and now owned by the author privately. The newly found manuscript documents designated as "An Account of Things Sold by Public vendue and the Names of the Several Persons who bought the Goods belonging to the Estate of John Choate Esq^r late deceased" pertain to John Choate (1737–1791), who was a local worthy in Ipswich, Massachusetts, and yet an obscure individual from historical perspective. The documents, therefore, have *never* been filed as a part of the Choate Family Papers in the Phillips Library at the Peabody Essex Museum in Salem, Massachusetts though they have a lot of information concerning a "common" people's micro world connected with a macro market. At first, in this article, we investigate and reveal the life events of John Choate himself and his children as accurately as possible, utilizing existing vital documents, a family history book, tomb description, etc. Then, we decipher the handwriting with full of abbreviations on several pages of the manuscript documents and produce the printed text of some part of the manuscript with their photos. By analyzing his consumption goods and production goods listed in the text, we unravel the world of John Choate including possible locations of some 20 heaps of salt hay and English hay in his farm situated in the Great Salt Marsh, and the realities of what a character of the family book calls the "dower business" of his second wife.

Keywords: Early National America, Ipswich (Massachusetts), John Choate, dower business, salt marsh hay